



## 文献紹介

### 〈進行がん患者における人生最後の1年間の健康関連 QOL の経過〉

Title: Trajectory of health-related quality of life during the last year of life in patients with advanced non-small-cell lung cancer

Authors: Are Kristensen, Bjørn Henning Grønberg, Øystein Fløtten, Stein Kaasa, Tora Skeidsvoll Solheim

Journal : Support Care Cancer (2022) 30:9351–935.

doi: org/10.1007/s00520-022-07359-x PMID: 36109393

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36109393/>

【背景】 本研究の目的は、進行した非小細胞肺癌（NSCLC）患者において、最後の1年間における健康関連 QOL（HRQOL）の軌跡（訳者注：「経過」と理解するとわかりやすい）を評価し、症状や身体機能の悪化が終末期に向かっていつ、どの程度加速するかを探索することである。

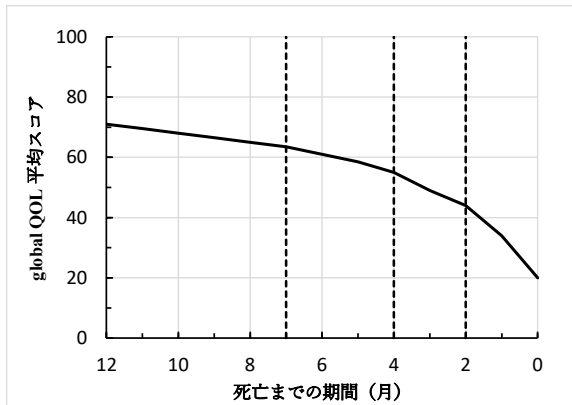
【方法】 進行 NSCLC における初回化学療法に関する 2 つの RCT のデータを分析した。HRQOL は EORTC QLQ-C30 および LC13 を用いて繰り返し評価した。HRQOL スコアの変化を死亡時との相対関係（訳者注：死亡時までの期間を横軸にとること）で調査した。

【結果】 研究対象となった患者は 730 人で、1 人当たりの HRQOL 評価の中央値は 4 回であった（範囲 1～9 回）。倦怠感、呼吸困難、食欲不振、咳嗽は、疾患の経過のすべての段階において最も明白な症状であった。またグローバル QOL、身体機能、主要症状の悪化率は、死亡 4 ヶ月前まで比較的緩やかであった。その後、低下は加速し、身体機能、疲労、呼吸困難については、最後の 2 ヶ月で非常に急速な低下がみられた。

【結論】 進行 NSCLC 患者は高い症状負担を経験し、それは時間とともに、特に最後の 4 ヶ月で悪化する。定期的な症状モニタリングは、患者がどのような経過をたどっているのかを明らかにし、抗癌剤を変更したり、症状に対する処置を行うきっかけとなり、終末期医療についての話し合いを促進する可能性がある。

### 【コメント(CM)】

この論文は進行した非小細胞肺癌（NSCLC）患者における最後の1年間における健康関連 QOL（HRQOL）の経過の結果である。亡くなるどれくらい前になると苦痛症状がでてくるのか、予後予測や意思の決定にも繋がる重要な点である。今回のがん種は NSCLC と限定はされているが、今まで報告されている様々な報告（Seow H, et al. *J Clin Oncol* 2011）と同様の結果が示されていた。終末期における HRQOL の変化率（図：論文の図を参考に作成、正確には原著論文を参照）を確認すると死亡の 4 ヶ月前と 1 ヶ月前に悪化していることがわかる。またもうひとつの図には、亡くなる直前には様々な苦痛症状が出現し QOL が急激に低下することが示されている。



論文の図1（予後1年での global QOL の平均値の推移）をもとに作成。数値は正確ではないので、原著で確認すること。

図2には各種症状の発現割合が示されている。いずれの図も、横軸は死亡までの時間で示されており、右端が0（死亡日）となっている。

**Background:** The aims of this study were to assess the trajectory (軌跡) of health-related quality of life (HRQOL) during the last year of life in patients with advanced non-small-cell lung cancer (NSCLC) and to explore (探索する) when and to what degree deterioration (悪化) of symptoms and physical functioning accelerate (加速する) towards the end of life.

**Methods:** Data from two RCTs of first-line chemotherapy in advanced NSCLC was analyzed. HRQOL was assessed repeatedly using the EORTC QLQ-C30 and LC13. Changes in HRQOL scores were investigated relative (相対的に) to the time of death.

**Results:** The study sample included 730 patients, with a median of four HRQOL assessments per patient (range 1-9). Fatigue, dyspnea, appetite loss, and cough were the most pronounced (明白な) symptoms in all phases of the disease trajectory. The deterioration rates of global quality of life, physical function, and key symptoms were relatively slow until 4 months before death. Then, the decline (低下) accelerated (加速する), and for physical function, fatigue, and dyspnea, there was a very rapid decline in the last 2 months.

**Conclusions:** Patients with advanced NSCLC experience a high symptom burden that worsens over time, especially in the last 4 months. Regular symptom monitoring may help identify where patients are in the disease trajectory, serve as a trigger for changes in anticancer and symptomatic treatment, and facilitate (促進する) discussions about end-of-life care.

2024.01.29.